# わたしの庭の魔女、女優、もしくは女帝

Masa Kumagai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
わたしの庭の魔女、女優、もしくは女帝

【Ｎコード】
Ｎ０７１３Ｙ

【作者名】
Ｍａｓａ　Ｋｕｍａｇａｉ

【あらすじ】
わたしは狂ってなどいない――。
エミリーの庭には、さまざまな女性が住み着いている。ロシアの現代魔女、失われた古代王国の女帝、名もなき往年の名女優。重度の統合失調症患者として精神病院の閉鎖病棟に三年間隔離されているエミリーは、彼女たちを信じ脱走を試みるが……。

# 01話　高揚

あまりに優しすぎると愛は真実を見失わせ、長く冷たい拷問へと変わるだろう。

Ｒｕｓｈ『Ｃｏｕｎｔｅｒｐａｒｔｓ』”Ｃｏｌｄ Ｆｉｒｅ”より

わたしの庭には、忘れ去られた女神、十代の魔女、役のない女優がいる。悪魔憑きの双子、失われた帝国の女帝、異教徒の女司祭、女王がいる。どれがいつ、どこであらわれるのか、それはわたしにもわからない。だからわたしは病院のベッドに縛りつけられ、目隠しされ、鼻に管を通されているのか。身体の自由も利かず、昼か夜かもわからず、そして、なぜここにいなければならないのかも、わからない。

『エミリー』

だれかがわたしの名前を呼んだ。

『ここから出たいでしょう？』

今風なティーンエイジャーの魔女タチアナが、潜在意識下からひょっこり顔を出し、語りかける。わたしはうなずいた。

『ほんとうに？　心の底から？』

疑わしそうに繰り返す。冗談じゃない。日に三本打たれる注射の

時間で、ようやく時間がわかるような状況なのに！　わたしは心のなかで叫んだ。怒りが収まらず、弱った喉に力を入れ、言葉にならない金切り声を上げた。

『なら、願うだけじゃだめ。わかる？　信じるの。だってあなたは、実際に、ここから出られるのよ』

わたしは怒り任せに起き上がろうとした。だが、手はだらんとして、握りこぶしもつくれない。足の指の感覚もなく、ベッドの戒めから抜け出せたとしても、おそらくまともに歩けないだろう。口の筋肉は弛緩している。枕もとがひんやりしているのは、よだれが垂れ流しになっているからだ。

『そうじゃない。それはあなたの妄想なのよ。やつらが薬を使って、あなたにそう思わせているだけ。よく聞きなさい、あなたは、できると思えばなんだってできるのよ。自分を信じなさい。それに、いまのあなたには、自分を信じる以外にできることはないのだから』

あなたがわたしを助けてくれるの？

『われわれにできるのは、エミリー、あなたの背中を押すだけ。あなたが真になにかを望めば、われわれはいかなる助力も惜しまない。魔術で手助けし、演じかたを教えましょう。奇跡を起こし、失われた知識を与えましょう』

わたしは身体の力を抜き、リラックスするよう努めた。薬が切れているのか、感覚は比較的はっきりとしている。だれもいない。ためしに、右腕を動かしてみた。力を感じる。足の指先まで神経を集中させる。問題ない。もしかしたら、逃げおおせることができるかもしれない。身体じゅうに絡みつくベルトの戒めから解き放たれれば、もしかしたら――。

『信じなさい！』声が言う。『あなたが信じたものに不可能はないのよ！』

大きく息を吐いた。驚くべきことに、喉にも力が甦っている。喜びと怒りがないまぜになり、身体じゅうをかけめぐる。わたしは自由だ！　わたしは喉が裂けんばかり叫んだ。腕を力いっぱい引き寄

せた。ぶちっという音とともに、革の拘束ベルトがちぎれとんだ。反動で、こぶしが頭上の壁にぶち当たった。振動が骨の奥まで響いたが、痛みは快感だった。同様に左腕、両足のベルトを引きちぎっていく。胴に巻きつくベルトをはずし終え、わたしはベッドから転がり落ちた。目隠しをはずし、テープで鼻に固定されている吸入器をむしりとった。これで自由だ！　ひんやりした床に横たわり、喜びをこめてキスをした。

立ち上がるのは難儀だった。両目はまだ明かりのまぶしさに反応できず、まともに開けられない。

ベッドに寄りかかるように立ち上がり、なんとか状況を把握しようとする。すると声が言った。

『目なんか！　それに、いまここがどんな状況だとしても、最悪なことには変わりない。一刻もはやく、逃げ出すのよ！』

「めくらのままで、どうやって逃げるというの？」喉が自由になったので、声に出して言った。返事はなかった。「教えて！　わたしを導いて――いつものように！」

背後から強烈な感覚に襲われ、危うくくずおれそうになった。みぞおちが冷たくなり、呼吸が不安定になる。ひんやりしたベッドのパイプを握り、息を整えながら、耳を澄ました。

「――そこだ。さっき物音がした」だれかがやってくる。「ひきむしるような叫び声も」

「気ちがいどもの館で、何者かの叫び声か。そいつは珍しいことだな」さらにもうひとり。「おまえ、それくらいのことでおれを呼んだのか？」

「あの患者はちがうんだよ。なにかをできる状態じゃないんだ。つまり、常におとなしくさせるよう処置を施しているから――」

「薬漬けってことか」

「統合失調症対策にアリピプラゾールとクロザピンを投与、それから毎日大量の筋弛緩剤だ。あんたの飲むコーヒーより量が多い」

「大量とは？」

「改善の見込みなし、ってこと」
「知らなかったな」
「おとなしい患者はあんたの専門外だからね。おかげであのエミリーは、自分で呼吸することすらできない。――かわいそうだけど、そうするしか方法がないんだ。こっちの身の安全を守るためにはね。ここへ来てもう三年になる」
三年。三年。三年――。
「おとなしい患者、とはね」さげすむような声。「さっさと死なせてやれよ。でなきゃおれが絵の描き方を教えてやる」
ふたりの笑い声と足音が近づいてくる。助けて！　わたしは目をきつく閉じて、願った。このままではあっさり捕まって、ベッドに引き戻され、拘束され、薬を打たれる――まるでビデオテープを巻き戻すかのように、ものの数分でいままでの苦労が水泡と帰す。
『助かりたい？　そして自由に？　ならば、強く願って！　そうすればどんなことでもできる！　これまであたしがウソを言ったことがある？』
「――でも、あなたは存在していない。ほかのみんなも――」
『いいえ、あたしは存在している。あなたのなか――あなたの奥底、あなた自身も知らない秘密の庭にね。難しいことはわからないけど。ただ、あたしはあなたが好き。あたしの想いを感じる？』
ああ、タチアナ。あなたの言うとおり。すると、ロシア生まれの魔女は濃いマスカラ越しににっこりと笑ったように感じた。わたしは手を取り、抱きしめる。
大きく息を吐き、弱気の虫を追い出した。ベッドから離れ、壁に触れながら歩いた。出口が必ずあるはず。ほどなくして、鉄製の扉に触れた。ノブをまわす。しかし案の定、鍵がかかっている。鍵穴がある箇所をなぞったが、のっぺりとした感触しか伝わってこない。部屋のこちら側には、鍵穴は必要ないのだ。ひざまずき、まぶたを強引に開けながら、壁と扉の隙間を、なぞるように上から下へ目を這わせた。ロックはふたつだった。ノブの部分と、下側にもうひと

つ。象が踏み潰さない限り、扉を開けるのは不可能だ。ただし、鍵が手に入れば別だが――。
　ベッドの向こう側へ行った。すぐに反対側の壁に当たった。部屋の大きさは数歩で横切れるほどだ。はじめて個室であることがわかった――ベッドのほかになにもないことも。だが、果たしてそうだろうか？　筋弛緩剤の副作用で、記憶が定かでなくなっているのかもしれない。上方に、四角い光の枠がある。窓だ。わたしはまぶしさに顔を歪ませながら、見上げた。瞳孔の調節がうまくいかない。この窓から逃げられるかもしれない！　弱った太腿を拳で叩き、そして思い切り手を伸ばした。硬くざらついた鉄格子を捕まえた。だがすぐに、窓へよじ登り、身体をねじ込み、外へ逃げるのは不可能だとわかった。鉄格子の隙間は、手のひらがやっととおるほどしかない。
　わたしは行為に没頭するあまり、聴覚をおろそかにしていた。だしぬけに、足音が扉の向こう側に立ち止まり、止んだのだ。静けさがわたしを打ちのめす。わたしは振り向き、鉄格子から手を離した。やつらが来たのだ！
「――動いている！」
「動いている？　どういう意味だ？」
「ベッドから起き上がっているんだ！　それだけじゃない、鉄格子に手を伸ばして――こっちを見た！　どういうことだ、エミリーは部屋を歩きまわっている！」
「――神かけて、ほんとうだ。どうやって拘束具をはずしたんだ？」
「引きちぎったんだ。あれを見て」
　沈黙。ひとりがふたたび神の名をつぶやいた。「ベルトがゆるんでただけさ」
「四つ全部がか？」
　わたしは二対の目に監視されているのを感じながら、捕らえられた実験用のサルのように、せまい部屋の壁に肩をぶつけながら、なんとか逃げ出そうともがいていた。

「よし、開けるぞ。用意はいいな？」
扉に鍵が差し込まれ、がしゃんという大げさな音とともに、錠が開いた。そして、もうひとつ。ある記憶が突如として甦り、肉体が現実世界から引き剥がされる感覚に陥った。膝をつき、ベッドのパイプを握り締めた。どんどん記憶の世界に引っ張られていく。男たちの怒号が聞こえる。腕を、脚を、身体を取り押さえる力強い手。絶対的な拘束具に支配され、注射器を構える男の手、無力感――。
『記憶の世界に支配されないで、エミリー』
タチアナが耳もとにささやく。わたしは腕と首の震えを抑えることができない。顔が冷たく、汗が皮膚の下から噴き出してくる。
『扉が開く。逃げ出すチャンスよ』
次の瞬間、ノブがまわされ、扉が開いた。わたしは歯を食いしばって、顔を上げた。視力はまだ完全には戻らない。ぼんやりとした白いしみと、灰色のしみ――部屋のなかにあらわれ、ゆっくりと近づいてくる。
「見ろよ。完全にイカレてるな」しみの片割れが、親しげに話しかけてきた。「もしもし？　あんた、どうかしたのか？　目が冴えて眠れないのか？」
「話しかけても無駄だ。はやく捕まえてくれ」
「こんなになるまで――楽にしてやりゃいいものを」
「はやくしてくれ！」
「おまえは扉のまえにいろ」
大柄なほうの男が、動物を捕獲するレンジャーのようにじり寄ってくる。パイプを握る手がじっとりと汗ばみ、顎から汗が一滴、滴り落ちた。どうすれば――タチアナ、わたしは逃げ出したい！　心の底から思っている！　だから教えて、わたしはどうしたらいいの？
『エミリー、あなたが薬に慣れるまで、かわいいあたしはせまくて暗い箱のなかに閉じ込められていたのよ。またあなたに会えてうれしい。で、これからどうする？　なにがお望み？』

わたしは叫んだ。
「ここから出たいの！」
『なら、殺してしまえば？』
その言葉に、わたしの身体じゅうの血が反応した。血は氾濫した土交じりの濁流のように駆け巡り、指先の一本一本にまで力を運ぶ。ベッドをつかむ手に、異常なほど力が入った。手が壊れてしまうのではと思うほど。
目の端に警備員を捕らえた。背後にまわりこんでいる。ちょうど窓の下の壁際。そこからわたしを羽交い絞めにし、薬を血管に流し込み、わたしの自由を一滴残らず奪い取るつもりなのだ。
殺してやる。
警備員が両腕を広げ、一歩踏み出すと同時に、わたしは身体をねじり、力のかぎりベッドを引き寄せた。長らく使っていなかった筋肉がびくりと痙攣した。警備員の顔を見た。目が大きく見開かれ、口はなにごとかを叫ぼうと開きかけた。わたしはかまわず、ベッドを振りまわし、壁に横殴りに叩きつけ、警備員を間に挟みこんだ。ぎゃっと悲鳴を上げ、悪態をついた。身動きが取れないなか、腰から警棒を抜き出し、わたしの頭に振り下ろした。とっさに腕を上げる。手首とひじの間を打ち付けられた。角度が悪かったのか、ぽきっという音がした。骨が折れたらしい。痺れと麻痺が右腕を襲ったが、わたしは興奮している。痛みは快感で、この男を支配し、征服してやることしか頭になかった。いいほうの手で警棒をつかみ、もぎ取った。取っ手に持ち替え、振り上げた。男は必死に逃げ出そうとしている。が、脚が挟まって動けない。
恐怖に顔が歪んだ。
「やめろ！」
体重をかけて振り下ろす。男は身体をねじって避けようとする。警棒の先が鎖骨に食い込んだ。女のような悲鳴――背後で影が動いた。振り返って警棒でけん制する。もうひとりの男は両手を挙げ、後ずさりした。

「それは降参という意味？」
「そ――そうだ」
視力が甦り、目の焦点も合わせることができるようになった。目の前の男は、白衣を着ているが、若かった。インターンシップで研修中なのだろう。
「わたしは、ここから出たい」
「落ち着いてくれ。だれもきみに危害を加えたりしない。わかるだろう、ただ、きみは病気なんだ。ぼくたちは、きみによくなってほしいだけで――」
「わたしは病気？」
男はうなずいた。
「病名は？」
「そこまで知らされていない。ぼくは、その――」
「インターンなのに、やることは薬の投与だけなの？　小間使いだけでなにも学べないのなら、研修先を変えたほうがいいと思う。わたしが紹介してあげましょうか？」
若い男は、わたしが「人間らしく」会話をしていることに驚いていた。わたしはみるみる身体に安定感が満ち、冷静な判断力が戻ってくるのを感じた。ただ、インターンの斡旋をする総合失調症患者のジョークは、少しくらい笑ってほしかった。
『なにやってるの？』
「ジョークがウケない」
わたしは答えてから、しかたがないので自分で笑った。
「人間と会話するのは久しぶり」
『わかってないようだけど、まだ正常な人間には見えない。はやく逃げて。安全な場所へ逃げてから、あなた自身の身体と、精神を取り戻すのよ。イサも手伝ってくれるはず』
「わかった」
わたしはうなずいて、研修生を見た。
「死にたい？」

ひきつった笑みを浮かべて、一歩下がった。
「まさか」
「あなたの仲間にしたことを見たでしょう？　必要なら、もう一度だってできる。窓を向いて、ベッドに手をついて」
警棒を振って促す。研修生は言われたとおり、ベッドに手をついた。壁の間にはさまれた警備員は、まだ生きていたが、受けた打撃の強烈さのために、抵抗する気力を失っていた。活気がみるみる抜け落ちていくのがわかった。
「助けてくれ」
お医者の卵は振り返る勇気もなく、泣きべそをかいていた。警備員の弱った姿を見て、うなだれるように下を向いた。
「シーツの上に鍵束がある。後ろに放り投げて」
二度うなずいて、鍵を投げた。わたしの足もとに、音を立てて落ちた。
「よく聞いて。仲間を呼ばれると困るの。だから、これから警棒であなたの脚を折る――両脚ともよ。それからわたしが出て行ったあと、鍵をかけてここに閉じ込める。了解？」
「いやだ！」
わたしは警棒を振り上げる。
「やめてくれ――お願いだ！　どう――どうしてそんなことを――」
「お医者の卵なら、そのくらい説明できるでしょう？」
小さいころは、ママの期待を裏切らない子だったのだろう。なぜなら、ママが望まないことをすれば、悲しげな顔で「わたしをがっかりさせないで」と言われるから。泣き落とされ、強制され、頬を殴られ、抱きしめられた。ママのかわいい坊や。立派なお医者になってね――。
滑り込んできたこの思考が、身体に変調をもたらした。麻薬のような怒りと興奮が消え失せ、代わりに水銀を飲み込んだような、得体の知れない不安が、内臓を満たしつつあった。
『エミリー、はやくして』

「腕に力が入らない」
自分の両手を見た。手首の皮膚が裂け、めくれ上がり、赤黒い血で染まっていた。信じる力。いまのわたしは、革の拘束具を引きちぎったさっきまでの自分が信じられなくなっていた。
『迷いが出たのね。どういうきっかけかわからないけど、こうなったら人間たちはほっといて、はやく逃げて』
タチアナはあからさまに不機嫌だった。
『あなたは悪くないと思う。ひどい仕打ちを受けて、弱っているんだもの。――でも、人間はみんな、自分を信じつづけることが難しいみたい。なんだかあたしまで信じてもらえてないような気分になるの』
わたしは残り少ない気力を振り絞り、落ちていた鍵束を手に取った。かわいそうな研修生は、膝が立たず、恥も外聞もなく、子供のように泣いていた。いまのわたしは、望むような一撃を与えられない。タチアナの言うとおり、わたしの変化を悟られる前に、ここを立ち去らなければ――。
なんて融通の利かない身体！　怒りがわずかに再燃した。わたしは怒りの炎を活力に変え、身体をひきずり小部屋を出た。重い扉を閉じ、鍵束から鍵をより分ける。どれがこの部屋の鍵だろう？　のぞき窓越しに、研修生がちらりと振り返った。なにかがおかしいと気づいたのだ。もう一度振り返る。今度は大胆に。はやく、鍵をかけなければ。
扉のプレートを確認した。部屋番号は六八五。同じ番号の鍵。鍵は無数にあった。この建物に隔離されている精神異常者と同じ数だけあるのだろう。わたしに気狂いのレッテルを貼った鍵はどれだ？
『ようやく、わかってきたみたい』
魔女タチアナがささやく。
『部屋の中を見て。男は気づきはじめた――あなたが脅威ではなく、おびえて、弱りきった女性なんだってことが。勇気を奮い起こせば、自分の力であなたを羽交い絞めにし、思うままに支配し、この厄介

な問題を解決できるということが。男は自分を信じはじめた。近づいてきた。あと数秒で、鍵のかかっていない扉を開け、あなたを拘束する』

わたしは鍵束を繰りながら、ヒステリーを起こした。

「信じる力で正しい鍵を見つけ出すことなんてできない！　人間には、そんな力は備わっていないの！」

研修生と、窓越しに目が合う。怒りに満ち、完全に自信を取り戻していた。何度か女性を経験して、ようやく行為を楽しむことができるようになった男の子の目。

『そうなんだ？　あたしは処女だけど。あたしが死んだのは十七歳で、男の子とつきあったこともない。ママが厳しかったの。男の人って、どんな感じなのか、あとで教えてよ』

タチアナが耳もとでささやく。わたしは思考をまとめることができず、狂乱状態になった。六八五！　ノブがぐるりとまわり、扉が向こう側へ引き込まれる。わたしはなんとか持ちこたえる。取っ手が血糊で黒く染まり、ぬるぬるとすべった。

「開けろ！」

研修生が叫ぶ。

「ひどい目に合わせやがって！　一生ここから出られないようにしてやる！」

わたしは無意識に鍵を選んでいた。もしわたしに――人間に、普段生活しているだけでは決して知ることのない未知なる力が秘められているのだとしたら――おのれを信じる力が、それほど強い、奇跡を起こすほどのなにかを秘めているのだとしたら。千もある小石の中に、一粒だけ光り輝く宝石。わたしはそれに手を伸ばした。

『それよ』

わたしは鍵を、空いているほうの手で差し込んだ。なんの抵抗もなく、するりと半回転し、がしゃんという音とともに強靭な力で扉をロックした。ノブを握る手を離す。反動で、わたしの身体は弾かれるように扉を離れ、尻もちをついた。扉は保っていた。男が怒り

に満ちた様子で、のぞき窓のガラスを叩き、くぐもった声で罵倒し、助けを叫んでいた。わたしはその様子を、その奇跡を、呆然と見やっていた。

タチアナが、満足そうに微笑んでいるのが感じられた。わたしはのろのろと立ち上がり、廊下を進んだ。人工的な黄色い蛍光灯の明かりに照らされ、時間の感覚を奪い去る。わたしの両脚は、長い時間ベッドに縛り付けられていたために、弱りきって、歩き方を忘れていた。壁を支えに、前へ進んだ。おしゃべりなタチアナが、わたしを退屈させまいと話しかけてくる。わたしはロシア語がわからないはずなのに、すべて理解できた。

『あなたは覚えていないかもしれないけど、イサはあなたが薬漬けで精神的に人間でなくなったのを見て、あなたの庭から出ていこうとしたの。イサは四千年前のヌナキの女帝だから、真の支配者を望んでいた。でも、いまは戻ってきているみたい。あなたも感じるでしょう？　あなたはさまざまな可能性を秘めている。だからみなにかまってもらえるのかもね。支配者にも、舞台女優にも、そしてもちろん、あたしの友達にもなれるのよ。――まあ、いまどき支配者なんて流行らないけど、イサは四千年前の人だから、古くさいのも当然なのかな』

タチアナはわたしの頭の中でけらけらと笑った。

わたしは苦労して、廊下のつきあたりまで歩を進めた。明かりを消してほしかった。あまりにまぶしすぎ、吐き気を催させる。意識が朦朧とする。右手に階段が見える。手すりに寄りかかるように、階段を下りる。手すりのすきまから階下をのぞきこむ。地上ははるか先だ。ひとつ下の階には、看護婦詰所があった。右手の角には歓談スペースがあり、テレビの音が聞こえてくる。人の気配はしない。時間が知りたい。

まずはこの建物から脱出する必要がある。そのためには、下へ降りなければ。

踊り場から下の階へ足を踏み出したとき、唐突に、テレビの音が

消えた。だれかがいる！　わたしが身構えるよりはやく、看護婦が角から姿を見せた。身を隠す場所はない。看護婦は立ち止まり、わたしを見上げる。
　看護婦はなにも言わない。誰何もしなければ、叫びもしない。ただ振り返ると、サンダルを鳴らして詰所へ駆け込んだ。
『どうする、エミリー？』
「わからない」
『まさか、このまま無事に外へ出られると思っていたわけじゃないでしょう？』
「わからないの！」
　わたしは金切り声を上げた。声帯を傷つけたらしく、激しく咳き込んだ。何度も何度も。そのうち胃袋が収縮し、胃液の味が口の中に広がった。
『なに言ってるの？　危険がそこまで迫っているのに、わからない、で済まして。あなたには脳みそがないの？』
　廊下の向こう側から、革靴の音が近づいてくる。それも、複数。何人いるのかわからない。看護婦が警備を呼んだのだ。わたしは必死で呼吸を整えていた。目を閉じ、大きく息を吐き出した。このまま終わらせてほしいと願った。だがわたしの庭の魔女が、女帝が、女優が、わたしに休息を許さない。わたしの肉体と精神の目覚めとともに、いまやすべての女性たちが、完全に姿をあらわしていた。わたしの中にいながら、わたしではない記憶、経験、思考が、口々に語りかける。わたしの記憶、経験、思考を侵していく。
『エミリー、選択するのよ』
　鋭いささやき声が脳を充満させ、わたし自身の思考を片隅へ追いやる。
『逃げようと思ってるの？　逃げつづければ、いつの日か追いつかれる』
『戦う？　戦いつづければ、いつの日か敗北する』
　そのとき、古代ヌナキの女帝イサが、それらのささやきに影を落

とした。切れ長の一対の目が、わたしをひたと見つめる。
『その顔は、諦めたがっているな？　諦めたら、一生諦めつづけることになる。地面に膝をついたら、一生膝をつきつづけることになるのだ――硬く冷たい地面に当たるまで、来る日も来る日も。だがそなたは、自ら命を絶つ勇気も持ち合わせてはいないな？　自らを戒めから解き放つ勇気、現世におけるもっとも崇高な行為――いかにも！　そなたは生にも死にも見放され、死にながら永遠に生き長らえるのだ』
　イサはわたしの記憶を強引に呼び起こし、突きつける。イサの年齢を超越した、なめらかで化粧っ気のない顔が、いつの間にか母親の、おびえ、疲れきり、皺だらけの顔に変わった。
　落下するような感覚に襲われ、身体の上下を失った。意識の世界に無理やり振り向かされ、母親のビジョンの前に投げ出される。
『この人物が、そなたの人生の半分を破壊し、残りの半分も破壊しようとしている。ゆえにそなたは半死半生の身。それはすでに存在せず、だがそなたの中にいまもあり、がっちりと心をつかんで放そうとしない――』
　母がわたしを見つめている。まなざしはよく覚えている。母はわたしが小さいころから、疲れ、背中が曲がり、年老いて見えた。笑顔は数えるほどしか見たことがなかった。
「ママはわたしの人生を破壊しない」
『これまでの人生、ずっとそうだったのではないか？　己は偽れても、わたしは偽れない』
　唐突に、ビジョンが消えた。視力が戻り、わたしのまわりに逃れようのない現実が甦った。人工の光に照らされた不自然な白い空間がぼんやりと浮かび上がり、血まみれの両手が、埃と砂でざらついた床をつかんでいる。階下から足音が近づいてくる。数人はいるだろうか。抵抗してかなうとは思えない。頭の中に、母の残像が残っている。感触、におい――。わたしは驚くほど落ち着いていた。わたしは振り返り、脚をひきずり階段を上りはじめた。向かう先には、

もちろん、出口はない。行き止まりがあるだけだ。だがわたしが――わたしの身体がそうさせたのだ。まだ抵抗したがっているようだった。手すりに寄りかかりながら上る。血糊が、血まみれのナメクジのように線を這わせている。

『そう、いい子ね。上へ向かいなさい。いちばん高いところへ』

イサが抑揚のない声で言った。タチアナは暗がりに下がり、姿が見えない。外出禁止でお仕置き部屋に閉じ込められたのだろうか。そう考えると、気分がよくなった。血液が頬まで駆け巡り、自然と笑顔が立ちのぼった。足首に力が戻り、わずかだが駆けることもできるようになった。

一段、また一段――。

『そなたはいま一度、母と対決しなければならない。なぜならば、そなたはいまだ不完全な精神に支配された動物に過ぎないからだ。――タチアナも言っていただろう、脳みそがないのかと』

女王イサは、口もとに手をやり、ヒステリックに短く笑った。

『そなたはまだ、自らの可能性を封じ込めたままでいる。常識に縛られ、隣人が足を一歩踏み出せば、その足を踏むまいと気を使っているのだ。愚かなことだ！　偉大な先人は、そのときどうしたか？　隣人のことなど気にしない。その足を、すべてを踏みつけにし、支配するのみ』

わたしは思い切り息を吸い込んで、活力をかき集めた。わずかに眩暈がするが、ずっと気分がいい。

「少し楽がしたい。エレベーターを使ってもいい？」

イサは無言だった。愉快だ。わたしはヤク中のようにへらへらと笑った。

どれくらい上っただろうか。わたしは夢中で塗り絵をする子供のようだ。ついに階段を上り終える。追っ手よりはやく。最上階はやや薄暗く、病棟はないようだった。行き止まりの非常扉に手をかけようとしたが、腕が動かなかった。血だらけの腕には痺れがあった。骨が折れているのを忘れていた。

背後を振り返る。いつの間にか、白衣が三人、向こう側の曲がり角から姿を見せた。わたしに気づいた。手のひらを向けてゆっくりと近づき、子供に話しかけるように言った。
「落ち着くんだ。危害は加えない。そこにじっとしているんだ」
口の中で苦い味がした。警備員を打ちのめしたときの感触が甦り、腕が震えた。扉を背にし、萎えていないほうの腕で、そっとノブをつかんだ。もし、鍵がかかっていたら？　そうなれば、逃げ道はないのだ。わたしはあっという間に捕らえられ、もと来た道を引き返すことになる。心臓が鳴った。
『上を目指しなさい。上へ――』
イサが低く、何度もつぶやく。わたしの庭の女王は、その権力をもってわたしをやさしく支配し、確信をもたらした。わたしは警備員に向かって、にっこりと微笑んだ。ノブをまわし、扉に体当たりする。重い防火扉が開き、光が隙間からあふれ出る。屋上へ飛び出し、思い切り駆け出した。男たちがわたしを追いかける。恐怖は微塵もなかった。新鮮な空気にすっかり魅了されていた。横殴りの突風がわたしに体当たりし、吹き飛ばそうとする。わたしはよろめきながら、金網のフェンス越しに走った。目の前に大きな雲があった。空は曇っていたが、充分に明るい。はるか下に車が走っている。人々が行き交っている――何十、何百と。そこには自由があった。すると、目の前に張り巡らされていた金網が消え失せた！　わたしはへりに飛び乗り、奇術師のようにバランスを取りながら進んだ。
「降りるんだ！」
追っ手は手を伸ばし、わたしを引きずり下ろそうとする。
「そんなところへ上るな！　落ちてしまう――」
風がわたしの服のすそをつかみ、左右に揺さぶった。わたしは構わず、身体の半分の幅しかないへりを、笑いながらふらふらと走る。いかにも、精神病患者なのだから、当然のことだ。だけど、そう決めたのはわたしじゃない。いったいだれが？　精神科医？　世間？　高校の担任？　もしくは、パパや、ママ――。だけど、わたしは

決めていない。どこのだれであれ、自分の人生を他人が決めていいことがある？　そんなバカげたことが、あっていいわけがないのだ！
わたしは立ち止まり、振り返った。目に涙がにじみ、視界がぼやける。三年間の記憶が、身体の奥底から甦る。
「わたしを追いかけるのはやめて！　わたしのことはわたしに決めさせて！」
「なにをするつもりだ？　まさか――ダメだ！　やめろ！」
わたしはくるりと振り向き、通りを見おろした。そのとき、タチアナがひょっこりと顔を出して、言った。
『おめでとう。あたしたちのせいで捕まっちゃったけど、自由になれるときが来た。これからのあたしたちの人生、とても楽しみだよ。――さあ、決断して』
そして無邪気に抱きつき、わたしの唇にそっとキスをした。愛しさで胸がいっぱいになる。
『ここから逃げ出せたら、お祝いしなくちゃ』
「ここは屋上なんだ！　きみはわかっていない！　落ちたら死ぬんだぞ！」
そう、わたしはすべきことを知っている。わたしはゆっくりと歩き、角までたどり着いた。医者はすぐそこに留まり、わたしに触れることができない。風がわたしの呼吸を奪う。耳の奥ががんがんと脈打つ。わたしは両腕を広げ、なんのためらいもなく飛び降りる。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0713y/

---

わたしの庭の魔女、女優、もしくは女帝

2011年10月30日22時17分発行